
ある日の私—壊れた幻想—

桜林薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の私―壊れた幻想―

【Nコード】

N2521Y

【作者名】

桜林薫

【あらすじ】

二次元と三次元のつかなくなった作者が、不可解な世界を渡り歩くストーリー。

断片的にブログへアップしたものをまとめた作品。

※精神汚染―マインドジャック―に注意（笑）

小生は最近、夢見が悪い。

原因は分らないが、厨二的思考が原因なのかも？　って考えたりしてる。

睡眠薬には頼りたくないの、他に即効性のある方法をとろうと思う…。

というわけで、小生と添いn――

激しい爆発音と共に、あたりを煙が覆った。

「なんと、齒ごたえのない――」

弓兵は笑みを浮かべた。雑事から解放された故の表情である。遠距離からの狙撃が標的を直撃したものの、念を入れての確認だった。

もっとも、その場所には塵一つ残っていないはずなのだが…。

「…小生をなめてもらっては困るなり、アーチャー…。いや、世界の守護者エミヤと呼ぶべきか…」

砂煙の中に浮かび上がる影。苛烈な爆心地に、平然と青年は佇んでいた。

「貴様…なぜ、その名を…」

余裕を持て余していた男が、わずかにうろたえる。

「unlimited blade worksルートなら、クリア済みなりよ」

「…ふん、それがどうした。私怨はないが、死んでもらおう」

「ご都合主義のために死ぬるほど、できた人間じゃないなりよ…」

「フツ…、魔術師でもない者が、英霊を相手にしてどのようなに戦うつもりだ？」

二本の剣を両手に構え、エミヤはじりじりと迫っていた。

「その余裕が命取りなり。呪文の詠唱なら、ほぼ済んでいるなりよ」
今度は自信ありげに、青年がニンマリとした。

「So, as I pray, unlimited illusion works（その体は、かなりの確率で幻想から出来ていた）！」

弓兵は思わず後ずさる。積み重ねた経験が、条件反射的に体を動かしていた。

侵食されていく周りの風景。強引にペンキを塗りたくられるように、世界は色を変えていく。

「…理解できん。なぜ、貴様も固有結界が使える」

※固有結界Ⅱ術者の心象 世界 をカタチにし、現実 に侵食させて形成する結界。

「厨二病患者をなめるでないナリ」

青年が言い終わるのと同時に、世界の改変が終了した。

巨大なパソコンが中心に立座し、何百冊もの本が浮かんでいる異様な光景が完成していた。

そして、この世のものとは思えぬ、極彩色の空は術者の心象世界を具現化したものなのだろうか。

「徒手空拳で何をするつもりかは知らんが、これで終わりだ…」

男は目にも止まらぬ速さで踏み込み、剣を振りかぶる。

「…誰が、自分で戦うと言ったなりか？」

「なっ…何？」

金属と金属が激しくぶつかる音、飛び散る火花。

弓兵の剣が獲物を狩ることはなく、中空で受け止められていた。

「ありえない」

二つの口が、同時に同じ言葉を発した。

「ど、どうして…ち、ちみのようなキャラが出てきたんだ」

危機を脱したにも拘わらず、青年は動揺していた。

「○ツツ（そろそろ著作権的に…）、次の単行本が出るまでには、少なく見積もってもまだ半年はあるなりよ？」

「…俺の知ったこっちゃねえ」

二本の剣が玩具に見えるほどの大剣が空気を震わす。うん…そう、

あの人です。

「な、なんで、いつも、セイバーが出てこないなりか。前は金ピカが出てくるし、超ベリーバッドなり」

目に涙を浮かべながら、青年は呟いた。

戦意を喪失していた彼は、フラフラと歩き出した。

「ここが小生の心象世界なら、セイバーは必ず見つかるはずなり。
：待っていて、ワタシの幸せの青い鳥：ぐふふ：」

彼は固有結界を展開するのにエネルギーを使いすぎて、なんだかイタイ感じになっていた。

「な、なにやつ!？」

直撃寸前の氷の柱をかわすと、彼は正気に戻った。さすが、元ゲーマー。反射神経だけは、忍者もビックリなレベルだった。

「：アーチャーが仕留めそこなったようね」

「まさか、君まで来るとは：。弓凛ペアで小生を狙うなんて、小生が君たちに何かしたというなりか？」

長袖の赤い服に、黒いスカート。後ろで二つに縛った黒い髪の毛が揺れている。彼女の鋭い視線が、青年の心を震え上がらせていた。ようするに彼はチキンであった。

「自分の胸に聞いてみなさい。さあ、ここが、アンタの墓場よ」

彼女の右手には、大粒の宝石が握られていた。にじみ出る紅い光が、禍々しい血の色に見える。

「そ、それ、小生に出来ないなりか？」

青年は右手を差し出すと、物欲しそうに少年のような瞳をして言った。

「：イヤよ。これ、高いんだから!」

頑なに拒絶され、彼の目は死んだ魚のソレに似た色合いに変わった。
「一時期、マイブームが来たなりが、ちみの存在がセイバーを凌駕することは、きっと無いなり：」

と、その時だった。揺らめくように影が現れて、徐々に像を結んでいった。

「な、なんなの？」

得体の知れぬ存在に、少女は動揺を隠しきれない。

「ヤンデレVSツンデレは見物なり。非魔術師でも強い人間がいることを、身を以って知るべしなり。あつ、麻婆神父も元々は魔術師じゃなかったなりね…」

虚空より現れたのは、桃色の髪をした少女だった。その右手には一振りの鉞が握られている。彼女は無言のまま、訝しげに周囲を見回した。

「――〇ツキーは、どこ？」

一切の感情を遮断したような声に、周囲の空気が凍りついた。

「ちみちみ、ちみの敵はあっちのツインテールなり。間違っても、小生を攻撃しないでほしいなり」

青年は正面に立っている少女へ、震える指先を向けた。

「や、やる気？」

勝気だった少女がうわずった声を上げる。

「さすがの小生もこの子はコワイなり。では、さらば！」

青年は踵を返すと、足早にその場を去った。

「ちょっと待ちなさいよ！」

「――ユツ〇ーはどこ？」

追撃を試みる少女を、もう一人の少女が遮った。

「愛の力で魔術に対抗できるとは、最凶のヤンデレキャラなりな…」
彼は激しい攻防の音を背にしながら、再びエキセントリックな世界を歩き始める。

荒れ果てた地平に青年は立ちつくしていた。

「自衛手段として固有結界を展開したのはいいなりが、どこまで行ってもセイバーはいないなりよ」

すでに二十代のはずの青年は、のび太くんによく似た空気を身に纏い、めそめそし始めた。

「……あれ？」

涙で滲む視界の先に、黄金に輝く何かを見つけた。

少しずつ近づいてくるそれは…

「……セイバー？」

気高さを感じさせる、たなびく髪の毛、凜とした美しい立ち姿。そして、陶器のように白く滑らかな肌。世界の終末を思わせる景色にあっても、変わらず輝きを放つ姿が、そこにはあった。

「――ふん…また、会ったな」

その声は、彼の希望を破壊するには、十分な威力を持っていた。

セイバーと見間違えそうになった人影は、いつぞや現れた天使だった。

「天使ちゃんマジ天使…：なんて言うと思ったなりか？」

のび太は気迫の『き』の字も感じられない弱々しい視線で、天使を睨みつけた。

「おお、怖い怖い。…愚か者よ、何か探し物か？」

天使は優しいような声音で言った。

「おととい来やがれ、なり。」

のび太はそう言い捨てると、天使を無視して歩き始めた。

「なぜ、お前の心象世界に私がいるのか、疑問に思わないのか？」

「むっ、痛いところを突くなりね…：そして、何が言いたいなりか？」

「お前の善性を具現化したのが、私という存在だということに、いい加減気づいたらどうだ？」

青年はすぐに振り返ると、目をすぼめて天使の姿をよく観察した。

その姿はどう見ても、変態以外の何者でもなかった。白のTシャツに白のブリーフという格好が、均整のとれた容姿をぶち壊しにしている。

「そ、そんな…：あんなのが小生の一部だなんて…：神様のイ・ケ・ズ」

彼はボケに走ることで、崩壊しかけた心をなんとか繋ぎとめた。

「どうやら、私の存在を認めたようだな。その素直な心に免じて、いいことを教えてやろう。たまには、天使然とした行動もせねばな」

「自覚症状があるとはタチが悪いなり。それにしても、この世界に

立花奏はいないなりね…」

青年はポツリと呟く。

「セイバーには、あちらの方角に行けば会える」

天使は青年が歩いてきた道とは、反対の方向を指さした。

「期待はしていないなりが、行くあてもないし、行ってみるなりよ」
青年は再び、トボトボと歩き出す。その後ろ姿は侘びしく、哀愁を漂わせていた。

彼は、灰色の地平をどこまでも進んだ。

時に心が折れかけたが、昔読んだ自己啓発書の一節を思い出し、自らを奮い立たせた。

「あきらめたら、そこで試合終了なり…」

どれぐらい歩いただろう。地平線の先に丘が見えた。彼はそれが希望の丘であってほしいと願った。

「んっ…手が…」

突然、左手から鮮血が滴り落ちた。彼が血を拭うと、そこにはアルファベットのSが三文字、刻まれていた。

「SSS? もしかして、『死んだ・世界・戦線』のことなりか?」
不思議そうに手を眺めていると、「問おう、貴方が我がマスターか?」

琴を鳴らすような美しい声が耳に入った。

「つ、ついに、セイバーに出会えたなりか?」

彼は陶然と正面を見据える。

美しい声音に魅了され、丘の向こうへと青年は歩き出した。

「小生が、ちみのマスターなり（キリッ）」

彼は満面のドヤ顔で答え、声の主を見据えた。

透き通るような瑠璃色の瞳に視線が交錯し、青年の胸に今まで感じたことのない感情が去来した。

「k t k r!」
キタコレ

彼は雄叫びを上げ、金髪の少女の元へ足を進める。

「長い道のりだった。stay／nightを購入し、F a t e l

ートをクリアしてから、早一年。ついにこの瞬間がやってきたなり」
彼女は丘の上に佇んでいた。

紺碧の海を思わせるドレスを身に纏い、穏やかな笑みを浮かべている。

青年はその気高き姿を何度、思い浮かべたであろうか。

一歩一歩踏みしめるように近づくと、ついに彼女の目の前にたどり着いた。

金の糸のように輝く髪の毛、強く凛々しいその瞳。白く滑らかな素肌。

そして、青年は彼女の頬にそっと、手を伸ばした。

「そう、白く滑らかな素肌——」

と、その途中で、彼の手が止まる。

「あれ、カサカサって…実物は以外に乾燥肌なりね…」
少しの違和感を覚えながら、目の前の少女を観察する。

「問おう、貴方が私のマスターか？」

「んっ…それはさっき聞いたなりよ…」

何かがおかしいことに、彼はようやく気がついた。

不自然なのは肌だけではない。先ほどから、彼女は一度も瞬きをしていないのだ。

「ま、まさか…」

浮かび上がる疑問を確かめるため、彼は少女の裏側に回った。

「そ、そんな…」

思わず、彼は絶句した。

「誰がこんな悪趣味なことを…」

待望のセイバーは、実は原寸大のハリボテで、その裏に置かれたCDプレイヤーから、某川澄さんの声が流れていた。

「しょ、小生のここまでの道のりは無駄だったというなりか…」

彼は地面に蹲り、慟哭した。

「…きつと、黒猫、黒猫、いいすぎたせいで、セイバーのマスターにはなれなくなったなりね…」

しばらくして泣き止んだ青年は、こう言った。

見上げると、極彩色だった空は灰色の雲が垂れ込める、無機質な空へと変化していた。

「むーねのおくーあーめがふるーここがおわりだときづいた、そのあとーには――」

「むーねのおくーはーなはさきーぼくはぼくであるいみをわーすれよう……」

彼は大仰に両手を広げると、遙か彼方へ思いを馳せ、歌い始めた。空からはポツポツと雨が降り始めたが、それでも、彼は歌い続けた……。

「うーん、彼は重度の厨二病のようすな」

白衣を着ている年老いた医師は、モニターを眺めながら、残念そうに言った。

「結果が出ました……」

そこに若いナースがやって来て、医師に何かの書類を渡した。

「奥さん、これが測定の結果です。ここ、グラフになってるでしょ？ この三番目と四番目の数値が高くなるのが、厨二病患者の特徴です」

医師はその書類を指し示し、正面に座っている女性に説明した。

「主人は……主人の厨二病は治らないんですか？」

「奥さん、誠に申し訳ないが、現状では、治療薬の開発はされてないんです。今のところ、対処療法がメインになってますんで……専門医を紹介しましょうか？」

「……はい、お願いします」

「おーい、三枝先生とここに紹介状書くから、書類持ってきて」

「はーい」

診察室の真ん中には透明な仕切りがあり、医師と女性を挟んだ反対側で、一人の男が眠っていた。

ベッドの上で横たわる彼の頭には小さな計測器のような物が取り付けられ、その隣にはモニターと、いくつもボタンのついた機械が置かれている。

「このあしゝでゝこのひとゝみでゝこのりよおゝうてでゝ」

男の口からはくぐもった声の歌声が漏れ、その瞳から一滴の涙が零れ落ちた。

「奥さん、大丈夫ですって。今では、厨二病も社会的に認められてきましたし、旦那さんは作家先生なんでしょ？ 商売の助けになっても、邪魔になることあないでしょ」

「…そうですね、たしかに作家としては悪くないことなのかもしれませんが…でもね、先生……」

「どうしました？」

「私、普段主人と過ごしていて、時折彼の厨二病的な発言にイラッとしてしまうんですよ」

そう言った女の瞳に感情の色はなく、冷え切った視線が横たわる男に向けられていた。

(後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2521y/>

ある日の私－壊れた幻想－

2011年11月16日03時10分発行